



2014年2月号、2014年11月号に続く第3弾!
お笑い芸人トウイチロウとその彼氏が繰り広げる
ハートウォーミングストーリー!!

恋人は いろもんの女房 お笑い芸人 3

樋口めぐむ イラスト/SUV

〈前回のあらすじ〉

芸人て先輩のタツキさんに告白され、恋人のナオに相談するお笑い芸人のトウイチロウ。先輩からこの間の無礼をお詫びしたいと恋人同伴で食事に誘われ、3人で会うことになり……。すると今度は恋人のナオにいいよるタツキさん。その行為を見てフチ切れたトウイチロウだったが、実はこれには裏があったのだ。

ぼくらを見破った大師匠

山深い森の高い橋、下は川、トウイチロウがバンジージャンプを跳んだ。

固定カメラで撮られた顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになり、「のわああああ駄目ええええ止めてええええ」と泣き叫ぶトウイチロウは、足首に縛られたヒモが、びよんびよんって宙を上下し、それを見て先輩芸人たちが腹を抱えて笑っている。

どうにか橋の上に救出されてヒモをほどかれるトウイチロウ。駆け寄る先輩芸人たち。

「ナイスリアクションやったわ」

「バンジー跳んだら若手ナンバーワンやな」

誉められているのに顔色が冴えないトウイチロウ。すると先輩芸人のひとりがトウイチロウの股間を指差して声をあげた。

「おまえ洩らしてるやんけ!」

「どんだけ怖がりやねん」

先輩芸人にツッコまれて、鼻水と涙まみれの顔で「ぼーん・でいす・うえい」とギャグを繰り出すトウイチロウの股間に失禁による染みが浮いている。VTRを覗いていたスタジオのゲストもお客さんも手を叩いて爆笑した。

そのバラエティー番組をぼくとトウイチロウは、リビングのソファに並んで座って観ている。

「よかったねー、ウケてる」

「赤っ恥だよー、バンジー怖い、まじで洩らしたもん」

ほんとに恥ずかしいのだろう、顔を赤くしているトウイチロウがおかしいやら可愛らしいやら、ぼくはつい笑ってしまう。

長くいつしよに暮らす恋人のトウイチロウは、ピンのお笑い芸人だ。生番組でゲイだとカミングアウトして、彼を主役にしたドッキリ(よりにもよって仕掛け人を背負い投げしてしまい視聴者から反響があった)が成功して、最近仕事が増えた。トーク番組でいじられるか、罰ゲームみたいなロケでリアクションを見せる仕事が多かった。

ぼくの隣で、トウイチロウが伏し目がちに紅茶をすすっている。ぼくに弱音を吐くことは決まっていなくても、最近の彼は何かの拍子に、こんな元気の悪い顔を見せる。

元気がないのは、トウイチロウがまだ駆け出した頃からとても可愛がってくれたピン芸人の江戸川橋ハゼ師匠が入院したからだ。

ハゼ師匠は八十ウン歳なのに、ついこの間まで浅草の舞台に立っていた。毒舌やシャレがきつすぎてテレビで活躍することはなかったが、勉強熱心で名もない若手芸人のライブを見歩くことを趣味としていた。

まだテレビに出られず、ほとんどお客さんのいないライブハウスで芸を披露するトウイチロウを見つけて、何が気に入ったのだろう、ハゼ師匠が声を掛けてくれて、ときどきご飯をご馳走してくれるようになった。そのことをトウイチロウはとても感謝して、テレビでの仕事が増えてからもハゼ師匠を慕っている。

でも、そんな師匠が入院をしたのだった。トウイチロウが言うには、どうも、長くはないらしい。

一度だけ、トウイチロウと共にぼくもハゼ師匠にご飯をご馳走してもらったことがある。浅草の有名だけど庶民的な天ぷら屋さんだった。その頃はまだトウイチロウはゲイだと世間のカミングアウトしてはなくて、ぼくのことは「同居している大事な友達」と教えて、すると「そいつも連れてきな」と師匠が言ったそうだった。

ハゼ師匠は縞柄の派手なスーツを着てカンカン帽をかぶり、びっぴかびかに磨いた革靴をはき、八十ウン歳なのにおしゃれでチョイ悪いじいだった。

待ち合わせた浅草の路上でご挨拶をして、「師匠、おしやれですね」と本音を伝えたら、「当たり前だ、しゃれっ気をなくしたら芸人はおしまいだ」と、カツカと笑った。

天ぷら屋の座敷で師匠は好物の野菜のかけ揚げをつまみに日本酒をゆっくりと飲み、ぼくたちはお任せで出てくるエビやアスパラをビールと共にご馳走になった。

食事の間、師匠はトウイチロウにうるさいことは何も言わなかった。「メシ食ってるか？」「ネタ作れよ」「テレビの仕事一本入った？ よかったじゃねえか」と、トウイチロウを温かい眼で見て酒を飲んでいった。

ハゼ師匠は芸について具体的なアドバイスを何ひとつトウイチロウに伝えないうけども、そのとつくりを傾ける仕事とか飲んでいる表情、さもない世間話の一つひとつが芸人そのもので、そういうものに触れていること事態が、トウイチロウにとっては勉強になったと思う。彼は、芸人の空気を直に吸ったのだ。

トウイチロウがトイレに立つと、師匠がにやりと笑いながらぼくに小指を立てた。「兄ちゃん、あんたトウイチロウの、コレだろ」

え、あ、とぼくは動揺して、ゲイだと知られたらまずいし、でも否定はできなくて言葉に詰まった。

師匠はぼくをからかうことをせず、ゆっくり日本酒を飲んでおり、それで、心がすつと静かになった。

「なんで分かったんですか？」

「芸人だもん、色事は何でもござれ、さ」

「師匠は、その、男同士とか馬鹿にしないんですね」

「当たり前だ、おまえらの人生じゃねーか、

好きに生きたモンの勝ちだよ」

秃げており側頭部にかろうじて白い毛が残る師匠は、入れ歯丸出しで大きく笑った。なんだか、ほつとする笑顔だった。

そのハゼ師匠の見舞いに、トウイチロウといつしよに明日行くことになっている。会えるうちに会っておかないと、後悔するだろう。

「ハゼ師匠のお見舞い、果物でいいかな」

「師匠なら酒、つて訳にいかないよな、病院だもん」

トウイチロウが冗談を言い、でも分かる、その表情が無理をしている。恩人と別れるときを迎えようとしていて気持ち暗くなっているのだろう。ぼくは、何も言わずにトウイチロウの肩を抱き寄せた。

芸人の恋人たるもの……

「おう、来たな汚れ芸人」

個室のベッドの上、入院着を着たハゼ師匠が思いのほか元気に毒を吐いた。

「もう、失礼なこと言うんじゃないよ」

ハゼ師匠の恋女房、ノリコさんが師匠の秃げ頭をびしゃりと叩いてぼくたちは笑う。まるで漫才のようだ。

ノリコさんはハゼ師匠より二十くらい年下だ。還暦をすぎても美人で明るくて、トウイチロウを師匠同様に可愛がってくれる。

ノリコさんはスナックをやっている。芸だけで食べてゆける成功者はほんの一握り

で、ハゼ師匠も例外ではなく、実質ノリコさんが家計を支えてきたのだ。

お見舞いの果物をノリコさんに渡して、ぼくたちはベッドの横の丸椅子に座った。「トウイチロウ、売ってきたなあ、よかったじゃねえか」

背もたれを立てて上半身を起こした師匠が言う。

「はあ、これも師匠や皆さんのお陰っス」

「おれは何にもしてねーよ……芸人は風向きひとつだなあ、才能あるやつは幾らでもいるが、風向きひとつで、おまんま食えるやつ食えないやつ、はつきり分かれちまう」

いつも冗談ばかりの師匠の眼が、和んでいるけれども真剣だ。その眼に、寿命が長くない、という事実を思い描いてしまう。

師匠の真剣さにトウイチロウも気づいたのだろう、ふだんになく真面目な声で言う。「仕事が増えたのは有りがたいですけど、迷いもあって……バンジーして洩らしたり、からいもん食ってリアクションするのが、ほんとに芸人の仕事か？って」

師匠はトウイチロウの顔をじつと見つめて、それから窓の外に視線を向けた。窓の向こう、青い空に雲が散っている。

「芸人は笑わせたモンの勝ちだよ」師匠が、落ち着いた声で言う。「客が飲べば上等だ、リアクションも立派な仕事だ。でもな、芸の良し悪しを決めるのは客じゃねえ、自身だ。トウイチロウ、テレビで忙しくても、芸を磨くの忘れちゃいけないよ」

「そ、そうですね……」

「ああー、おれも、もういつペン舞台上に立ちてえなあ」

「師匠」

それだけ言うと、トウイチロウが黙ってしまった。ハゼ師匠とトウイチロウにしか分かり合えない何かがある。空気を察してふたりきりにしてあげようと思い、ぼくはそつと席を立った。

個室から廊下に出ると、ノリコさんが壁にもたれていた。

「ナオちゃん、あたし喉が渴いちゃった。お茶付き合ってちょうだい」

「あ、はい」

ぼくたちは、病院の一階の喫茶店へ行った。

「どうだい、売れて時間がないだろうけど、トウイチロウちゃんはネタ作ってるかい？」
珈琲をすすりながら、ノリコさんが問う。控えめに塗られた口紅が、還暦なのに彼女の色つぼく見せている。

「はい、仕事から戻ると大学ノートに何か書いています。あと、落語や漫才をしよっちゃゆる聴いていますね、耳でリズムとかおもしろいフレーズを憶えようとしているみたいで」

「感心感心。若いうちは寝る間を惜しんで勉強だ」

病院の窓の外に芝生が広がり、芝生が陽射しに照らされて、のどかな光景だ。

そののどかな光景を横目に眺めながら、のんびりした声で、ノリコさんが言う。

「いまみたいに芸人がチャホヤされる前は

ね、ハゼみたいなのは『いろもん』て呼ばれたんだ。ハゼはお客さんにはウケるけど、口惜しかっただろうね、芸を評価されず、とうとう陽の目を見ずにおつち死んじまう」

ぼくは、何も言えなくなった。「ホモ」とか「オカマ」とぼくらが呼ばれて馬鹿にされるように、ハゼ師匠も「いろもん」と軽く扱われていたなんて。ノリコさんが、悲しい言葉とは裏腹に明るい笑顔をぼくに向ける。

「ハゼは、トウイチロウちゃんが可愛くって仕方ないんだね、あたしら子どもができなかったから、なんだか孫を授かった気分だよ」

「……どうして、ハゼ師匠はトウイチロウを可愛くしてくれるんでしょう？」

「さあねえ：ハゼは、『芸人は最後は人柄だ』って酔っぱらうと言うね。トウイチロウちゃん、アホだけど、いい子だから」

「あは。そうですね、アホだけどいいやつ」

ノリコさんが、ひまわりのように笑う。
「いろもんの女房になるって、どういうこと分かるかい？ あたし、ハゼと所帯を持って、いい目に遭った事いっぺんもない。でもね、ハゼと暮らして、毎日が愉快だった」

分かる気がする。ぼくもトウイチロウと暮らして、毎日がバタバタだけど楽しい。

「ナオちゃん、芸人はいいときもあれば悪いときもある。世間がなに言っても、女房は夫の味方してやるんだよ」

「はい」

ぼくは、ノリコさんの眼をまっすぐに見

て答えた。ノリコさんの耳元に、おくれ毛があつて、それが、彼女を疲れさせているように見える。

芸人の彼氏はつらいよ

会社から高円寺に帰宅して、スーパーマーケットでネギを選んでいる。

トウイチロウがまだテレビに出られない頃、ふたりでデートで、ハゼ師匠の舞台を視に行つたことがある。

むちゃくちゃだった。

最初、ハゼ師匠はオーソドックスな漫談を披露していたのだけれども、反応が鈍いと思つたのだから、ネタの中盤で「歳だなあ、脚がくたびれちまつたよ！」と言いつ放つたかと思うと舞台から空席の目立つ客席に降りて、「うまそうだ、ひとつご馳走してくれ」と男性客の饅頭を勝手に食つたり、

「おお、美人発見」と中年のご婦人のとなりに座り、「お嬢さん、今晚ヒマ？」とナンパを始めて、お客さんを笑わせていた。

それは、落語家や漫才師みたいに「まっとう」な話芸をする者から見たら、邪道、な芸だと思つた。「客いじり」は「下ネタ」と同じく、芸としては低級なものとされている。

でも、ハゼ師匠の客いじりには、どこか品があつた。舞台上に長く立つてきた者の余裕とプライドが感じられた。テレビに出られず世間に評価されず金を稼げない、でも

舞台を愛した師匠の芸にぼくは胸を熱くしながら、とても笑つた。

師匠は退院できないだろう。二度と舞台上に立てず、お客さんを笑わせることは、もうないだろう。

芸にすべてを捧げた男が二度とお客を笑わせられない、それは、取り返しのでないことである気がする。

ネギを、買い物カゴに突っ込みトマトを選んでみると、「あの——」背後から声を掛けられた。またか、と思いつながら振り向くと、会社員風の女性が立っている。

「あの、間違つていたらごめんなさい、トウイチロウさんの彼氏さんですよ」

トウイチロウを主役にしたドッキリ番組で、顔にモザイクを掛けずにぼくも出演した。肩書きは「トウイチロウの彼氏」で、それが放送されて以来、たまーに街で声を掛けられる。

「あの、サイン下さい」

「あ、ごめんなさい、サインは勘弁してください、ぼく、ただの素人なんです」

女性の顔に残念そうな表情が浮かび、だが、どこか押し付けがましい感じで言う。

「じゃあ、握手してください、それくらいいいでしょ」

トウイチロウのファンだから、その彼氏と握手する権利があるという理屈なのだろうか。ほんとは握手だつて厭だが、断わりと面倒に巻き込まれそうなので差し出された手を握つた。

「きゃー、ありがとうございます。あたしゲ



イのひとを見たの初めて。トウイチロウさん応援してます、がんばってください！」うれしそうに女性がスーパーマーケットの奥に消えた。ふん、言われなくてもトウイチロウはがんばっているし、ゲイは見世物じゃない。

街で声を掛けてくれるひとのほとんどは、トウイチロウのファンで好意的だ。

でも、ごくまれにだけど、すれ違いざまに「ホモ。キモっ」と罵られることもある。そういうときは、「いまだきゲイを認められないなんて時代に乗り遅れているんだね」と哀れみと軽蔑を感じてスルーして終わる。

ドツキリに出たとき、ゲイ友の反応ははっきりとふたつに分かれた。

「何テレビ出てんの、ウケるwww」とか、ヘナオの相方ってトウイチロウなんだ、びっくり」とラインしてくるひとと、もう友だちと呼んでいいのかすら分からないが、テレビに出たことを妬んでネットで匿名でぼくをディスっているやつもいる。それくらい覚悟していたのだから、腹も立たない。

ぼくには、ぼくなりの思いがあってテレ

ビにゲイだと顔をさらしたのだけれども、それに賛成反対の両意見があるのは自然なことだ。でも、簡単に批判する前に「ひとにはそれぞれ事情がある」と少しだけ考えられると、有りがたいのだけれども。

ネギの刺さったエコバッグを提げてマンションにもどると、あれ？ リビングの明かりが灯り仕事に出ているはずのトウイチ

ロウが帰宅している。

「どうしたの？」

問うと、トウイチロウの顔色が青い。

「ハゼ師匠、亡くなったって。ノリコさんから電話もらった」

「え」

予想はしていたけれども、ついにその事態を迎えて、ぼくは絶句する。トウイチロウは仕事を抜けてきたらしいのだけれども、動揺しているのだろう、ぼくへのメールも忘れたっぽい。

「喪服どこだっけ。お通夜行かなきゃ。ああ、香典袋ないや」

あからさまにトウイチロウが取り乱して、ぼくは、そつと彼を抱き締めた。

「トウイチロウ、落ち着いて」

「……だつて、だつて師匠が」

ぼくの胸に顔を埋めて、トウイチロウが消えそうに小さな声で言う。

「トウイチロウは芸人だろ、落ち着いてちやんとお別れしよう。ぼくも、お通夜行くから」

「……うん」

抱き締めるうちに、トウイチロウのこわばっていた身体がほぐれてゆく。腕をほどいて、喪服を出すために寝室に入った。

師匠の最後にあつぱれ！

タクシーを飛ばして葬儀場に着いたのが午後十時近くで、もうお通夜は終わっているようだった。弔問客は誰もおらず、菊で

飾られた棺の横に、喪服姿のノリコさんが立っている。お線香の匂いがして、大きな遺影のハゼ師匠は、とてもいい笑顔だ。

「ノリコさん、この度は」

トウイチロウが深々とお辞儀をして、ぼくも深く頭をさげる。

「トウイチロウちゃん、ナオちゃん、よく来てくれたね、ハゼもあの世で飲んでるよ、さあ、顔、見てやってちょうだい」

ノリコさんがぼくたちを棺の前へと案内する。トウイチロウは、ぐすつと鼻をすすつて涙をこらえている。

無理もない。長く舞台上に立ち続けてお客さんを笑わせ続けたハゼ師匠。好きなように生きたのだからうけれども、世間に評価されず、無念の思いもあったらう。

無念だったのに、弱音を吐かず人を恨まらず、トウイチロウを孫のように可愛がってくれた。ああ、お亡くなりになる前に、師匠にもう一度舞台上に立ってほしかった。

「さあ、お別れしてやってちょうだい」

ノリコさんが、棺の小窓を開けた。

「……！」

「……！」

小窓の向こうに横たわるハゼ師匠の顔を見て、ぼくたちは言葉を失い、それから爆笑する。

「ぶはははは、そんなアホな！」

「うそでしょー、師匠まちですか！」

ハゼ師匠の頬には「天才バカボン」みたいにならず巻きの模様が描かれて、鼻の下にはちよび髭があり、おでこにキン肉マンの

ように「肉」と書かれていた。

「ノリコさん、これ……」

ぼくが問うと、ぐすつ、とノリコさんが笑う。

「馬鹿だろう、遺言でね、『おれは死んでも芸人だ、後生だから弔問客を笑わすようにしてくれ』って」

「師匠、ずるいよ、死んでそんなギャグされたら笑っちゃうよ……」

トウイチロウが、鼻水も涙も盛大に流しながら苦笑している。それを見ているうちに、ここは師匠の最後の舞台だと思い、芸人の死に様を見せつけられたからだろうか、我慢し切れずにぼくはハンカチを眼に押し当てて、ひっくひっく言いながら泣いた。

泣きながら顔をあげると、ノリコさんは満足そうにぼくを見ていて、すごい、夫が亡くなっても、ノリコさんは、いろもんの女房としての役目を立派に果たしたのだ。

劣るように、トウイチロウに肩を抱き寄せられた。遺影を見れば、「どうでえ、おれは芸人だ！」とでも言うように、ハゼ師匠が歯をむき出しにして大きく笑っている。

お通夜の後の契り

喪服を脱いでシャワーを浴びて、寝室に入ると裸でトウイチロウがベッドに横たわっていた。

パジャマも着ないでどうしたの？と、ぼくは問わず、無言で隣に寝転ぶ、腰にバス

タオルを巻いただけの姿で。

長い付き合いだ、言われなくなったって分かる、彼は、いま、悲しんでいる。なんの見返りも求めずに可愛がってくれた師匠が亡くなって、彼は悲しんでいる。

悲しむ恋人を慰められるのは、ぼくだけではないだろうか。

枕に頬を預けて、間近にあるトウイチロウの顔を引き寄せる。唇に唇を合わせて、何度も味わってきたキス、何度もしてきたキスなのに、なぜだろう、初めて交わしたように新鮮な気分だ。

唇を離すとトウイチロウの眼がいつになく鋭くて、今度は逆に、トウイチロウに唇をむさぼられた。

それは、いつもの親愛の情を示すキスではなく、なんだろう、性欲に直結した荒々しいキスだった。きつと、悲しくてやけっぱちな気分になっているのだ、トウイチロウが烈しくぼくを求めている。今夜は動物みたくに、ぼくを食べてもいい。

腰に、トウイチロウのあれが押し付けられている。行き場を捜し求めるように、熱く硬い。

それに反応して、ぼくのあれも大きくなる。バスタオルを取られた。

トウイチロウがぼくの胸を、腋の下を舐めて吸う。ふだんにはない荒々しい愛撫、別人と抱き合っているような錯覚、思わずぼくは声を洩らしてしまう。

「ナオ、濡れてる」

ぼくは顔が赤くなるのを感じた。トウイ



チロウに言われるまでもなく、ちんこから先汁が出ている自覚があったから。

「しかた、ないじゃん…」

ぼくは言い訳をして、でも聞いていない風にとウイチロウがぼくの腿を、お尻を撫でる。とウイチロウの手のひらは大きく温かい。いじわるだ、あそこをさわってほし

いとぼくが考えていることに気づいている癖に、焦らしているのだ。

我慢し切れなくなつて、ぼくは、はしたなくねだる代わりに、無言でナイトテーブルの引き出しを開けてコンドームをとウイチロウに渡した。たとえ悲しくやけつばちなどときだって、性病予防はしないと。

「ナオ、助平だな」

とウイチロウにからかわれる。そうだよ、

ぼくは助平だよ。でもね、一番に助平な気分になるのは、とウイチロウだけなんだ。

ゆつくりとウイチロウの身体をベッドに仰向けに押し倒して、彼のやけつばちな気分をほぐすために、彼の身体を撫でて、愛

撫し、ときに胸の突起を舐める。

「ナオ：気持ちいい」

素直で直球の感想に、ぼくの胸がしくんと鳴く。盛りあがった胸、引き締まった腹筋、ほどよく太い脚と散らばった毛、何度もふれ合った身体だけでも、とウイチロウのそれは、いつだってぼくをうれしく、同時に苦しきさせる。

「今日、後ろ使いたいな」

とウイチロウが言う。

「でも、洗ってないし」

「いまから洗えばいいじゃん」

とウイチロウがベッドから起き上がり、ローションを片手にトイレへと連れてゆかれる。コンドームをかぶつたぼくらのちんこは、膨らんだままだ。

洋式トイレにぼくは座りドアを閉めようとしたら、とウイチロウに手で遮られた。

「なんだよ恥ずかしい、閉めてよ」

「ナオが洗うとこ、見たい」

「へんタイだ。へんタイだけでも」

本心から恥ずかしいのに、直球で要求されるとすべてをとウイチロウに見られたくもある。だって、共有する秘密が増えれば増えるほど、ぼくらの結びつきがよくなるんじゃない？

ぼくは廊下に立つとウイチロウに見おろされたまま、シャワートイレを操作して後部の穴を洗った。

洗浄が終わって水を流して便座から立ちあがろうとすると、「そのまま」ちんこを勃てたとウイチロウがぼくの前にひざまずく。



「あ、やだ」

「やだっと言うわりに、これ、びんびん」

ああ、恥ずかしいのは本当なのに、トウイチロウの視線を感じてぼくのあれがみなぎっている。

便座にまたがり脚を大きく広げさせられて、その奥の穴に、ローションを塗ったトウイチロウの指が伸びてくる。

「あ、うっ、ん」

「痛いっ」

痛みはほとんどなく、すんなり穴は指を受け容れて、ただ、初めてのシチュエーションでいじられているから、思わず声が洩れただけだ。

穴をほぐしながら、トウイチロウがぼくのちんこを咥える。下半身が燃えているようだ。こんなにも淫らに乱暴に求められたら、ぼくじゃなかったって、おかしくなる。

充分に穴がゆるんだ頃、ぼくたちは位置を入れ替わった。便座に座るトウイチロウの股間で大きくなったあれが、ぶるぶる震えている。

ぼくはトウイチロウをまたぎ、徐々に腰を沈めていった。

「あ、いい」

「ナオ」

狭いトイレで不自由な体勢だけれども、トウイチロウが腰を動かし始める。

「ナオん中、あつたけー」

ぎこちない動きがかえって刺戟的で、ぼくは思わずトウイチロウの頭を抱えて唇をむさぼった、動物みたいに抱いているのは

トウイチロウだけじゃない、ぼくの中の獣も目覚めている。

いつの間にか、ぼくは床に足をつけて自分で腰を動かしている。もっと深くつよくトウイチロウとつながりたくて、腰を動かしている。

腰をふるぼくのあれを、トウイチロウが握って擦る。握りながら乳首を吸われる。

「あ、くっ」

声を洩らしてぼくは喘ぎ、限界が近づいて、コンドームの中に精を放った。

その後しばらく腰をふり、ぼくから抜いて、ゴムを外してトウイチロウも床に射精した。

事が終わり、狭く薄暗いトイレで、ぼくたちは息を乱しながら抱き合っていた。乱れた息は次第に整い、音はなく、なんだか世界中でふたりぼっちの気分だった。

ぼくの肩に頬を預けたまま、ぼくを見ずに、トウイチロウが言う。

「…ひとつで、死んじゃうんだな」

「…そうだね」

「…死ぬまで、しっかり生きないと」

「…うん」

ぼくは、まだ心の傷が治っていないだろうトウイチロウの頭を撫でた。世界中でふたりぼっちの気分。

ぼくの恋人はお笑い芸人！

四十九日を過ぎたということで、亀戸の、

ノリコさんのスナックに来ている。平日でお客さんは常連さんばかりで、ぼくはカウンター席の隅でビールを飲みながら、店の奥の映りのよくないテレビを見ている。

テレビではバラエティ番組が放映されていて、トウイチロウも出演している。ノリコさんはカウンターの中で常連さんに冗談を言っており、ノリコさんの後ろにハゼ師匠の写真が飾ってあった。

テレビに映るバラエティ番組は、海外の動画を紹介してゲストがちやちやを入れたり感想を述べたり、まあ有りがちな内容だった。トウイチロウはひな壇の後列に座っていて、その前に、男性性だけ仕事草が女性性っぽい大御所のオネエタレントさんがご意見を積極的に座っている。

金髪の赤ちゃんがコミカルな失敗をする動画が流れて、司会者の先輩芸人にトウイチロウがコメントを求められた。

「いや可愛いっスねー、あんな赤ちゃんならおれもほしいっス」

とトウイチロウが発言した瞬間、お約束と言えはお約束なのだけれども、前列の大御所オネエタレントさんが、わざわざ後ろをふり向いてトウイチロウに嘸みついた。

「芸人なのにつまんないコメントねー、大体あたしらオネエなんだから赤ちゃん持てるはずがないでしょー！」

「いや、でも何かの拍子に…」

口ごもってしまうトウイチロウ。きつと頭の中には「養子」とか「同性婚」とかの単語が浮かんでいるだろうけれども、それ

を口にできるほど日本のバラエティは成熟していない。政治的な発言は「法度だ」。

「何かの拍子って何よ、もうちよつと気の良いコメント言いなさい！」

とお約束で叱られた瞬間だった。

「うるせえっ、おれはあんたが好きだああああっ！」

と脈絡なく叫んで大御所オネエタレントさんの頬を両手でわしづかみにして唇を奪うトウイチロウ。会場のお客さんからあがる悲鳴。

が、そこはさすが大御所、オネエタレントさんも芸人のノリを分かっている、見ればトウイチロウの首に腕をまわして熱烈にキスを交わしており、司会者の先輩芸人に「もうええわ」と、ふたりが頭を叩かれてお客さんが爆笑した。思わずぼくも苦笑してしまう、破調の、めちやくちやな笑いの取り方だけど、これって、ハゼ師匠の芸風にそっくり。

「トウイチロウちゃん、化けるかもしれないねえ」

気がつけば、ぼくの前にノリコさんが立っている。

「化ける？」

「芸人はね、急におもしろくなっちゃうことがあるんだよ、それを化けるって言うの」

ぼくは、画面にアップで映ってギャグを飛ばすトウイチロウを見た。

「へー」

「かなしいことや、つらいことを経験すると、吹っ切れるんだね、芸に深みが出るの。ト

ウイチロウちゃんも、化けそうな気配があるね」

「そうなんですか、そうならいいなあ」ノリコさんが、青い、とでも言う風に微笑した。

「そうとも限らないよ、化けた芸人の女房するの、大変だからね」

ハイテンションでトウイチロウがギャグを飛ばしていて、眼にいつもの穏やかさがなくて、なんだろう、ちよつと怖いものを感じる。真剣にお笑いをやるって、常に脳みそをフル回転させていて、狂気に片足を突っ込むことなのかもしれない。

トウイチロウが、変わってしまったかもしれない。濃厚で、ぼくだけを見ている彼ではなくなってしまうのだろうか。

生唾を飲み込む。大丈夫。覚悟はできている。

だって、ぼくはいるもんの恋人。

へ了

お笑い芸人シリーズ最終話「恋人はお笑い芸人 第4弾！」をパディ2015年6月号にて掲載予定です。どうぞ、お楽しみに！